

別府湾の不思議

別府大好き人間が視る

仲 矢 一 幸

先日、別府駅から大分駅へ行き特急電車の車内で「ブリーズ」と云うJRの機関誌を入手した。本の中程に吉田初三郎の九州島の鳥瞰図が大きくページを割いて掲載されていた。

驚いたことにこの地図には別府市が中心に描かれていて、久し振りに見る鳥瞰図の美しさに見惚れてしまった。ふと思ったのは、なぜ九州島の中心に高崎山や由布・鶴見岳を描いたのだろうか。

JR九州支社の説明文では関門海底トンネルの開通（昭和十七年七月）以前の図であり、当時、別府を代表する有名人、油屋熊八と昵懇の間柄であった吉田初三郎の心からの提供品であったからだと言明されている。

もちろん、油屋熊八への心からの提供品の説明を否定するつもりはないが、当時、九州島が本州と陸路で結ばれていない時代は海からの表玄関は別府港であり、特に京阪神・四国

の旅客・物資の大動脈であったことも別府を中心に描いた理由の一つだと思われる。

また、この図は詳細に見ると、日豊線・久大線・豊肥線の各路線がすでに結ばれていて九州管区の鉄道担当部局では将来・大分・別府駅が熊本・佐賀・宮崎・小倉を結ぶ九州の基幹駅としての考えもあったのではないかと、少し大分、別府をひいき的な目で見る思いもある。

私は現在、別府史談会という団体で別府を中心にした歴史を学んでいるが、別府という土地は歴史的にも大変魅力のある事柄が多い。

まず、別府湾が約百万年前から年間一センチ程度の速さで広がり、百万年後の現在、十キロメートルほど広がっていることになる。これには別府、鳥原地溝帯という名称でまでついている。この地溝帯は火山でも結ばれていて、鶴見・由布・伽藍岳・九重・阿蘇・普賢岳は現在も噴煙を上げている。アフリカ東部の大地溝帯は有名であるが、日本の地溝帯は小規模ながら沖縄トラフにつながっているのではないかと云われている。

古代史の中でも別府湾は九州の表玄関にあたり運河の役目をしている瀬戸内海で、豊後と畿内は船で結ばれた幹線交通

網の中心であった。国東半島的美濃崎にある御塔山古墳おとうやま（杵築市白石）と佐賀の関半島のつけ根にある亀塚古墳は別府湾に入港する船の燈台に代わるものであったと云われている。

現在では、ややもすると別府は温泉観光のみで生まれた街のように思われがちであるが、二万五千年も前の十文字原・羽室台周辺には我々の祖先である別府人が、佐賀県の腰岳の黒曜石や姫島の黒曜石を使って生活していた事実を知ることにも別府住民として大切なことだと思う。

私は「別府大好き人間」の一人として、この土地を奥の深い、すばらしい歴史をもった街であることを誇りに思い、これからも住み続けていきたい。

大分の宝「別府」

齋藤 哲

もう四十年以上も前の話である。私は大学のクラブの関係で、東北の温泉地に行った。宿の女将は、宿帳に「大分県別府市」と書くのを見て、「だいぶんけんべつぷし」と読み、「別府はだいぶんけんにあるの」と怪訝けげんそうな顔をした。その頃から別府はメジャーであり、大分県はマイナーであった。

それから数年後、私は大分県職員になった。県庁生活の大半を企画部門で過ごしたが、別府は大分の中核であり「大分の宝」であると感じていた。即ち「別府を核に大分をメジャーにする」戦略を思い描いていた。

第一段は「別府くじゅうリゾート構想」である。高度成長期を経て豊かになった国民に欧米諸国並の余暇を提供する施策であった。「リゾート」とは、フランス語で「足繁く通う」という意味である。私は「別府、湯布院、くじゅうは、リゾートそのものだ」と考え、別府湾から九州横断道路を通りくじゅうに至る構想を、ほとんど既存の観光地や施設を活用して造り上げた。その結果、ハウステンボスやシーガイア等多くの